



祓い儀礼から見た呉越神歌の文化史的意義

顧 希佳（杭州師範学院教授）

1 祓除とは中国古代に災難や邪気をはらうために行われた儀式である。一説によると、一般的に年初に宗廟や社壇で、3月には水辺で行われたと考えられている。『周礼・春官・女巫』に、「歳時に祓除衅浴を掌る」とあり、鄭玄の注に、「歳時の祓除は、当今の三月上巳（旧曆三月三日、三月上旬の巳の日）の水上の類のようなものである」とある。祓除は“禊”とも呼ばれ、一般的に春と秋に水辺で行われた。春秋時代の祓除は、行われた時間・場所・方式がそれぞれ異なり、状況は比較的複雑で、火を焚くことや香をたいて沐浴すること、いけにえの血を体に塗ることなどはどれも災いをはらうことができると考えられていた。古代には“衅”という儀礼があり、人または動物の血を大小さまざまな器物や建物に塗るといったものである。これも災難や邪気をはらうものであり、祓除と相当近いものであった。さらに“儼”という儀礼も同様に一種のはらいの巫術であり、その巫術によってはらうものは、その当時の人々に対して有害な事物であった。これらによってはらわれるものというのは、初めはとても曖昧模糊とした、例えば“陰気”や“晦気”といった実体のないものであった。後にだんだんと明確なものになっていき、一般には“疫鬼”、つまり人類に災難や病気をもたらす妖魔鬼怪をさすものになり、後に“瘟神”と呼ばれるようになった。つまり、祓除・禊・衅・儼はみな中国古代の儀式行為であり、それらの核となっていたのは巫術信仰であって、その主な目的は、災難・病気・不運・禍害など人に害のあるものをはらうことであった。後にそれらは広く心を浄化させることをさす意味を派生させるようになっていった。（省略）

2 中国の呉越地方では、太湖流域を中心として、歴史上非常に特色ある民間文化現象が存在した。その大きな特徴は、歌手（巫師）がある儀式を執り行い、人々のために疫鬼をはらい、福と加護を求めるといったものである。この儀式の基本的な構成は“請神 酬神 送神”である。儀式ではたくさんの神々を祭らねばならず、これらの神々によって構成される神譜は、ただ単純に仏教や

道教のみで構成されるのではなく、仏・道・巫の三教が合わさった、比較的複雑な民間宗教の形態を呈している。通常この儀式は寺院や廟、道観などでは行われず、一般的には家の中、あるいは祠堂の中や田野・庭などで行われる。またこれは一戸の家で行っても、数戸から数十戸の家が共同で行ってもよく、家単位でも村落単位でも行われる。儀式の時間は、短ければ数時間から1日、長ければ三日三晩から五日間ないし七日間かけて行われる。この儀式の中間部分である“酬神”は、入念に線香やろうそく、供え物などを用意する他に、神々の前で様々な民間芸能を演じることを特に重視する。演じる形式はとも多く、決して各地一律ではない。歌・舞・説唱・戯曲・雑技・武術・民間工芸美術など様々で、一般的にはやはり歌を主とする。民間でこの種の習俗に対する呼称も様々で、例えば神歌・賛神歌・騷子・太保書・童子会・唱靈經・夫人詞などと呼ばれているが、比較的多くの地域で神歌と呼ばれている。この儀式を執り行う人は、和尚や道士といった宗教職業者ではなく、半職業または非職業的に迷信活動に従事している人である。彼らは能弁でその地域の文化に精通しており、特に歌に非常に秀でていて、“神歌先生”と呼ぶ地域が多い。我々は“神歌手”と呼ぶが、彼らは事実上この種の民間文化の伝承者となっている。彼らが儀式の中で演じる内容は、多くは手書きの抄本の形で伝承される。平時はそれを読んで覚えることができるが、儀式の中では暗記していなければならず、抄本を見ながら演じることはできない。

筆者はこの民間文化を“呉越神歌”と呼び、長期間にわたって調査を行った。筆者はこの呉越神歌は中国巫文化が後世に伝承されていく中で形成されていった重要な支脈の一つであると考え。（以下、薩滿文化、儼文化と呉越神歌を比較した一文が続くが、省略。）この方面に関する状況については、拙著『祭壇古歌与中国文化』（人民出版社、2000年）をご参照いただきたい。

3（呉越神歌と祓い習俗との一般的な関係について述べた文章があるが、省略。）

呉越神歌の中で、我々は“送龍舟”の行事をよく目にする。儀式が“送神”の段階に入ったときに、神歌手が凶神を送る方法と、正神・善神を送る方法とは異なっている。神歌手が後者を送るときには、普通“送神歌”を歌い、神碼を焼いて礼拝などをする。そして前者を送るときには、凶神の神碼を祭壇からはずし、あらかじめ作っておいた龍舟に乗せ、神歌手が“参船発舟”(あるいは簡単に“龍舟”という)を歌って龍舟に向かって参拝し、それらの凶神が速やかに去り、永遠に戻ってこないことを請う。そして龍舟を川に浮かべ、一匹の黒魚に龍舟を牽かせて遠くに運ばせたり、あるいは龍舟を郊外に(あるいは海まで)運び出して焼いたり、あるいは龍舟を寺院に運んでぶら下げたりする。つまり、ここに一種の巫術が存在しているということは、疑う必要もないのである。もちろん、そこにははらいだけでなく祈禱も存在している。少し具体的な言葉で形容するならば、ちょうど「硬軟両様の手段をあわせ用いる」ということであろう。人々は凶神に頭を痛めつつもどうすることもできず、ただ神々を招いてもてなし、美味しい食べ物を振る舞い、良いことを言って持ち上げ、それから手のひらを返したように騙して舟に乗せ、神々を遠ざけて、永遠に戻ってきて騒がせることができないようにするしかないのである。ある意味ではこれも一種の“祓除”であり、ただすでに変化してしまっていてそれと識別しにくくなってしまっているのである。

“送龍舟”の民俗活動は、浙江の民間で盛んに行われ、呉越神歌の儀式の中にだけあられるのではない。筆者はこのことについて調査研究を行ったことがある。例えば温州一帯では、往時疫病が流行するたびにその地域の人々は道士に“羅天大醮”の儀式をするように頼み、あわせて“送紙船”をする。まず一隻の普通の船とそっくりの大きな紙の船を造る。道士が儀式を行って6日経つと、最後の日に紙船を海まで送り、燃やしてしまう。これで“瘟神”を遠ざけたと考えるのである。温州一帯の“唱靈經”(または“南游”“唱夫人”とも言う)の中では、“送耗”という行事もある。一般的には儀式の過程で3回“送耗”を行い、順序に従ってあらかじめ準備しておいた紙船を川のほとりで焼く。寧波の馬村では、“祓茅船”と呼ばれる儀式があり、これも鬼やらいのためのものである。巫者が種々の演技を行い、妖魔鬼怪を脅して舟に乗せ、その後その“茅船”を水に投げ入れ、遠くに流れるに任せる。麗水一帯では、“送花船”がある。人々は各家庭に隠れたいわゆる妖魔鬼怪をすべて探し集め、“花船”に乗

せ、それから川の流れるに乗せて遠くに流れるに任せることをシンボリックに行なう。金華では、往時道士が執り行う“打清醮”の儀式があり、その中の行事のひとつにも“送紙船”があった。武義では昔、端午節の祭に“推端午船”の風俗があった。当日城隍廟で祭祀儀礼を行い、大船とも言うべき大きさの紙船を造り、船上に“五鬼”という5体の紙人形を縛りつける。道士が儀式を執り行い、“五鬼”に船に乗るよう催促する。それから人々は紙船を押して大通りに沿って狂奔し、最後には船を川に投げ入れて遠くに流してしまう。台州の椒江では、“大暑船”という民俗活動がある。“大暑”の日に、人々は盛大な祭りをを行い、最後に瘟神“五聖”が乗っているという大きな紙船を海まで送り出して焼くのである。習俗上、これもその土地の人々の平穩無事を願うためのものと考えられている。

まとめとしていうと、呉越神歌の儀式中の“送龍舟”はどれも同じようなものであり、古い祓除・驅讎の後世における変化であると理解することができる。浙江の民間では、一般的にそれらを“送瘟神”とも呼ぶ。この龍舟は瘟神のために準備したもので、人々はいろいろな方法を取り、脅したり騙したり、硬軟両様の方法を使って瘟神を龍舟に騙し乗せ、龍舟を川や海まで送り出し、流れに任せたり焼いてしまったりする。これによって災難と病気をすべてはらってしまえると考えているのである。つまり、これもなお一種の巫術行為なのである。

注：この文章は7月23日に開催したワークショップ「祓いの儀礼と技法」でご報告いただいた顧先生に、ワークショップ終了後ご報告要旨に加筆していただき、大学院生の川島純枝さんの手を煩わせて翻訳していただいたものである。ただ紙面の都合で一部割愛して掲載せざるを得なかった。文中にその部分を明示したが、文意を不分明にしまったところがあるかも知れない。筆者・訳者に無断で省略したことをお詫びする。(山口建治)



ワークショップ(2005.7.23開催)の様子。